

沖縄における子どもの貧困と世代間連鎖

—親と子のライフストーリーに着目して—

○ 立命館大学大学院 黒川 奈緒 (7091)

キーワード：子どもの貧困、ライフストーリー、貧困の世代間連鎖

1. 研究目的

近年、貧困世帯に育つ子どもが、学力・健康・家庭環境・職業選択などさまざまな側面で、貧困でない世帯に育つ子どもと比べて不利な条件にあることが指摘され、子ども期の貧困は、子どもが成長した後にも継続して影響を及ぼしていることが明らかとなっている。このような現象は「貧困の世代的再生産」「貧困の世代間連鎖」としてイギリスやアメリカといった海外で実証的に検証され、日本においても社会的あるいは経済学的アプローチの中で多面的に研究されてきた。

子どもの貧困に関わる研究においては、貧困状況下に置かれた子どもたちを主体として捉える「子どもを中心に据えたアプローチ」が社会学の分野を中心として多く見られるようになってきたが、社会福祉分野においては必ずしもそうではなく、発展途上の段階といえる。また、「貧困の世代間連鎖」についても親と子の双方に聞き取りを行い、親の生い立ちやこれまでの歩みを明らかにしながら、連鎖が生じる過程について実証的に明らかにした研究は多くない。

そこで、本研究では、経済的に困窮している家庭の親と子どものライフストーリーから彼／彼女らの暮らしや生い立ちを把握し、貧困の実態と世代間連鎖の構造を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

日本の中でも特に、沖縄県における子どもの貧困については「日本全体の子どもの貧困状況を凝縮したもの」とも指摘されるほど深刻な事態となっており、沖縄県における「貧困」及び「貧困の連鎖」に関連する体系的な研究が求められている。本研究では沖縄県内の都市部に住む貧困世帯に着目し、トヨタ財団助成プログラム「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」および、このプロジェクトに全面協力している NPO 法人と関わりのある 32 名を対象として、聞き取り調査を実施した。2 名の調査員が半構造化面接を用い、調査対象者の話に合わせて質問の順番や聞き方を変えていくという形をとった。聞き取り時間はおよそ 1 人 1 時間～2 時間であった。調査項目については大人に対しては健康状態や病歴、学歴・仕事歴、住居・転居歴、家族歴等、これまでの歩みや現在の生活について、また生活保護をはじめとする制度の利用、支援機関等の社会資源との関わりについてお話を伺った。子どもに対しては「1 日の過ごし方」「熱中していること」「親との関係（よく話すか）」「将来の夢」の 4 つの視点から聞き取りを行った。

3. 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮としては、高校生以上の対象者には聞き取りを行う前に、本調査研究の趣旨を説明し、個人情報特定されない形で研究成果の発表等に活用する旨の

同意書に署名を行っていただいた。また、中学生以下の子どもについても、事前に保護者に対して本調査研究の趣旨および個人情報の取り扱いについて説明し、調査協力の了承を得た。

4. 研究結果

インタビュー調査の結果、親世代の話から見てきたのは幼少期からの貧困であり、中には3世代にわたって貧困が連鎖しているケースもあった。戦後、本土で進んだ社会福祉制度の拡充も、本土復帰を待たなければならなかった沖縄。高度経済成長期の経験もほとんどない中で、安定した収入が得られない不安定な労働、低賃金や長時間など劣悪な労働環境とそれに起因する家庭環境の問題（離婚、DV等）が2世代・3世代にもわたって続いていた。また、「毎日、仕事で精いっぱい、子どもには寂しい思いをさせてしまっているかもしれない」と語る親もおり、厳しい就労状況の中で子どもとの関わりにも制限が生じていることがわかった。親子間でのコミュニケーションの体験が乏しく、安心して何でも話せる関係性を親との間で築くことができない子どもたち。中には、思春期に家出や深夜徘徊、飲酒といった「問題行動」につながったケースも見られた。こうした家庭環境における問題が一因となって低学力・低学歴となり、結果として職業選択の自由が制限され、将来的には貧困に結びつき、「貧困の連鎖」が発生する。近年、本土においても問題となっている「貧困の世代間連鎖」が、沖縄ではすでに何世代にもわたって発生しており、このまま子どもの貧困に対して対策を講ずることなく放置しつづけるとどうなるのか、日本の行く末が垣間見えるといっても過言ではない。

このほか、子ども・親世代ともに1日3食の食事が確保されていないこと、借家で世帯人数の割には部屋が狭かったり、部屋数が少なく子どもの勉強部屋を確保できていない実態が明らかになった。また、「専門学校に行きたいけどお金のことが気になる」と語る子どもがいたように、進路や希望が明確にある場合でも、そのための進学先の学費や塾にかかる費用などの不安がぬぐえず、選択肢が狭められる状況に直面していることがわかった。子どもたちからは将来に対する希望・期待と迷い、諦めが交錯する複雑な気持ちが見て取れ、家庭での経済的な事情が、「夢を持つことすら諦めてしまう」といった現状があった。

5. 考察

貧困状態におかれる子どもたちは最低限の食・住が確保されていないだけでなく、人とのコミュニケーションに困難を抱える経験を持っていたり、将来の見通しにおける不安を抱いていた。将来に対する不安は親世代にも共通するものだったが、中には生活保護や支援機関をはじめとする社会資源の利用で、これから先の生活に希望を見いだしている者もいた。貧困には様々な困難が関連しており、子どもたちと親、教育関係者、社会福祉・NPO関係者、地域住民が関係を築く中で、その困難の1つ1つに丁寧な関わりと継続的な支援が求められる。貧困の連鎖の解消には、社会福祉関連制度の拡充はもちろんのこと、こうした支援の具体的方法の解明と体制づくりが課題となる。

※本研究はトヨタ財団（地域社会創造プログラム）による助成を受けた「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」（代表 繁澤多美）の一環として、特定非営利活動法人いっぽいっぽの会および立命館大学大学院石倉研究室と共同で実施された調査である。